

## 豊かに蒔く者は、豊かに刈り入れる

コリント人への手紙第一 9章 6-15 節

### はじめに

私たちの教会では、今年から月ごとのテーマを決めています。どのテーマも信仰生活の基本となるもので、毎月第一主日は、そのテーマに従って説教することになっています。7月のテーマは「デボーション」、8月は「礼拝」、9月は「奉仕」、10月は「伝道」、そして11月は「献金」となります。

コリント人への手紙第二は、8章から「献金」がテーマとなっています。ここでの「献金」は、具体的にはエルサレム教会の貧しい信徒たちを支える援助金のことを意味しています。コリント教会が、自分たちの教会の活動を支えるための献金のことではありません。

しかし今日の聖書箇所である9章6節からパウロは、献金をする際の一般原則について語っています。それは、他の教会を支援する援助金にも、自分たちの教会の活動を支えるための献金にも共通する一般原則です。

### 1. 献金は祝福を刈り入れる

パウロは6節でこう言います。「**私が伝えたいことは、こうです。わずかだけ蒔く者はわずかだけ刈り入れ、豊かに蒔く者は豊かに刈り入れます**」。

献金は、私たちの財産の一部、収入の一部を献げることですが、それは決して失うだけのものではないとパウロは言います。それはまるで、種を蒔くようなものだと言います。つまりそれは、ただ単に犠牲を払うだけのものではなく、祝福となって帰ってくるものだ教えているのです。

献金は、お金を「失う」ものではなく、「蒔く」ものです。それはつまり、やがて芽を出し、実を結び、収穫となって自分の益となって帰ってくるものなのです。ですから、わずかだけ献金した人はわずかな祝福しか帰ってきませんが、豊かに献金した人は豊かな祝福となって帰ってくるのです。

イエス様もこう言われました。「**与えなさい。そうすれば、あなたがたも与えられます。詰め込んだり、揺すって入れたり、盛り上げたりして、気前良く量って懐に入れてもらえます。あなたがたが量るその秤で、あなたがたも量り返してもらえるからです**」(ルカ 6:38)。

パウロも他の箇所で、このように言っています。「**人は種を蒔けば、刈り取りもすることになります。…失望せずに善を行いましょ。あきらめずに続ければ、時が来て刈り取ることになります**」(ガラテヤ 6:7、9)。

献金は、ただ自分の財産を犠牲にし、失うだけのものではないのです。献金は、種を蒔く

ように、収穫を期待できるもの、私たちのもとに祝福となって帰ってくることを期待して、信じて献げるものなのです。

もし私たちが献金を、ただ犠牲を払うだけのもの、ただ失うだけのものと考えていたら、わずかしか献げられないでしょう。しかし私たちが献金を、私たちに祝福をもたらすもの、献げた分だけ祝福となって帰ってくるものだと思えることができるなら、豊かに献げることができるでしょう。献金は、献げる人に祝福をもたらすものなのです。

私たちは、献金の祝福を経験しているでしょうか。「わずかだけ蒔く者はわずかだけ刈り入れ、豊かに蒔く者は豊かに刈り入れる」。献金の祝福は、経験した人にしか分かりません。この御言葉を信じて、実行した人にしか分からないことなのです。

私は 30 歳で神学校に入学しました。その時すでに結婚し、長女の基香も 1 歳でした。神学校での学びは三年間ありましたが、その期間まともな収入はありませんでした。母教会からの献金や奉仕の謝礼などのわずかな収入があった程度です。しかし私たちは、そのような中でも収入の十分の一を献げる献金を怠りませんでした。その結果、三年間の間に次女の結良が生まれ、三女の歩祈が生まれてもなお生活が支えられ、無事に卒業することができたのです。この三年間、家計をやりくりした千穂佳は大変だったと思いますが、食べ物がなくなったことも、学費が払えなかったことも一度もありませんでした。その都度、神様が必要なものを備えてくださいました。ある教会に行った時、知らないうちにカバンの中に無記名の封筒が入っていて、そこに十万円が入っていたこともありました。私たちはその時、神様の御言葉が真実であることを経験し、神様は今も生きていることを確信することができたのです。

旧約聖書にも、同じような証しが書かれています。預言者エリヤが一人のやめもの女性に、「一口のパンを持って来てください」と声をかけました。しかし彼女は貧しく、自分と息子のパンしかありませんでした。彼女は、最後に息子とパンを食べて死のうとしていたのです。しかしエリヤは言いました。「まず私のために小さなパンを作り持って来なさい。そうすれば、『主が地の上に雨を降らせる日まで、そのかめの粉は尽きず、その壺の油はなくなるらない』」。彼女は、エリヤの言葉を信じて、自分と息子のパンを献げたのです。すると彼女の家の粉は尽きず、壺の油はなくならなかったというのです。

8 節には、「**神はあなたがたに、あらゆる恵みをあふれるばかりに与えることができになります。あなたがたが、いつもすべてのことに満ち足りて、すべての良いわざにあふれるようになるためです**」とあります。また 10 節には、「**種蒔く人に種と食べるためのパンを与えてくださる方は、あなたがたの種を備え、増やし、あなたがたの義の実を増し加えてくださいます**」とあります。神様は、献金を献げる人の生活を支えてくださいます。生活に必要なものをすべて備えてくださり、豊かに祝福してくださるのです。

献金は、単なる犠牲ではありません。私たちに祝福をもたらすものです。献金は、神様の祝福を信じて献げるものです。献金には信仰が伴うものです。信じて豊かに献げた人は、神様の豊かな祝福を経験するでしょう。その人は、神様の御言葉が真実であること、神様は今

も生きている方であることを経験するでしょう。その経験は、私たちの信仰を成長させ、私たちの信仰に強い確信を与えてくれます。

## 2. 心で決めたとおりに献げる

8 節でパウロは、献金の一般原則のもう一つの面を語っています。「一人ひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は、喜んで与える人を愛して下さるのです」。献金は、決して強制ではありません。金額が決められているのでもありません。あくまでも献金は、自分の心で決めるものなのです。

旧約時代の捧げ物の規定は、「十分の一」でした。神様は、旧約時代の神の民を徹底して訓練しました。マラキ 3：8-10 でこのように語っています。「人は、神のものを盗むことができるだろうか。だが、あなたがたはわたしのものを盗んでいる。しかも、あなたがたは言う、『どのようにして、私たちはあなたのものを盗んだでしょうか』と。十分の一と奉納物においてだ。あなたがたは、甚だしくのろわれている。あなたがたは、わたしのものを盗んでいる。この民のすべてが盗んでいる。十分の一をことごとく、宝物倉に携えて来て、わたしの家の食物とせよ。こうしてわたしを試してみよ。一万軍の主は言われる―わたしがあなたがたのために天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうか」。

神様は、旧約時代の神の民に徹底して「十分の一」の捧げ物を教育しました。「十分の一」を献げないことは、神様のものを盗むことだとまで言われました。旧約時代の捧げ物の規定は、ある意味で命令であり、強制でした。しかしそれは、神様が、神の民を徹底して教育するためでした。

しかしイエス様がこの地上に来られ、十字架と復活で私たちの罪の贖いをなし、神様の愛と恵みがより明確に、豊かに示された新約時代は違います。新約時代の捧げ物の原則は、命令や強制ではありません。喜びをもって、自分の心で決めるのです。旧約時代はある意味で子どものような時代です。神様は、神の民を子どものように徹底して訓練し、教育したのです。私たちも子どもたちには命令をします。たとえ子どもたちが納得できなくても、強引に従わせます。子どもが道路に飛び出そうとしたら怒ります。お菓子ばかり食べてご飯を食べなかつたら怒ります。勉強をしないで携帯電話ばかりしていたら怒ります。そして時には罰を加えます。子どもには、ある意味では強引に従わせなければならないことがあります。子どもたちは、その時は分からなくても、後になって親の命令の意味が分かるようになるでしょう。

しかし子どもが大人になったら、命令はしません。強引に従わせるようなことはしません。本人の意思に任せるのです。本人に決めさせ、本人に責任を取らせるのです。

新約時代は、ある意味で大人の時代です。神様の愛と恵みがより明確に、豊かに示された時代です。神様が求めていることは、旧約聖書にすべて書かれています。神様はある意味で私たちを大人として扱っています。神様の教育と訓練、愛と恵みはすべて示されました。神様は私たちを大人として扱い、私たちを強制するのではなく、自由に応答することを求めて

いるのです。神様の教育と訓練、愛と恵みに喜んで応えることを求めているのです。

私たちは決して、旧約時代の神様の教育と訓練を無駄にしてはなりません。私たちは、神様の愛と恵みがより明確に、豊かに示された時代に生かされているのです。私たちは、もはや子どもではありません。強制されて従う者ではありません。私たちは大人として、自分の意志で、神様の愛と恵みに応答して従うことが、神様から期待されているのです。

献金に関してもそうです。神様は旧約時代の神の民を徹底して「十分の一」によって訓練し、教育しました。それは、旧約時代の神の民はある意味で子どもであったからです。しかし、新約時代の神の民である教会は、神様の恵みと愛がより明確に、豊かに示されて、もはや大人として期待されています。私たちは、旧約時代の神様の教育と訓練を決して無駄にしてはなりません。子ども時代の教育と訓練を踏まえて、今、大人として、自分の意志と自由に任されている者として、また神様に期待されている者として、どのように献げるかを、自分の心で信仰をもって決めなければならないのです。

私たちは、具体的にどのように献金額を決めていったらよいのでしょうか。その一つは、旧約時代の規定の「十分の一」でしょう。これが神の民への神様の訓練の一つの規準でありました。もう一つは、教会の予算です。今月、信徒総会があり来年度の予算案を決議します。この予算に対して、自分がどのくらい献げれば予算が満たされるのかを考えるのです。予算を承認するという事は、自分もその予算に参加することを意味します。自分が献げなくても、予算が満たされると考えるべきではありません。私たち一人ひとは、キリストのからだの一部です。キリストのからだの一部として、しっかりと予算に参加していかなければなりません。

## **おわりに**

献金の一般原則の一つは、「わずかだけ蒔く者はわずかだけ刈り入れ、豊かに蒔く者は豊かに刈り入れる」というものです。献金は、祝福です。単なる犠牲ではなく、献げた分、自分に祝福となって帰ってくるものです。献金は、神様の祝福を期待して、信じて献げるものです。神様は、私たちの生活に必要なものはすべて備えてくださいます。ぜひ一人ひとりが、献金の祝福を経験していきましょう。

献金の一般原則のもう一つの面は、「いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにする」というものです。私たちは、神様の愛と恵みがより明確に、豊かに示された時代に生きています。旧約時代とは違って、命令や強制ではなく、自分の意志で自由に神様の愛と恵みに応答することが期待されています。旧約時代の教育と訓練を決して無駄にすることなく、信仰をもってしっかりと自分の心で決めていかなければなりません。

献金は、喜びをもって、祝福を信じて献げるものです。神様はこう言われます。「こうしてわたしを試してみよ。わたしがあなたがたのために天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうか」。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちに財産をお与えくださり、感謝します。私たちに健康を与え、家族を与え、仕事を与えて、私たちの生活に必要なものを与えてくださって感謝します。イエス様が「あなたがたは神にも富にも仕えることはできない」と言われたように、お金は私たちにとって、神様と肩を並べるほど、私たちの心を奪うものです。私たちの心は、神様よりも、お金に頼ろうとしてしまいます。私たちは、与えられた財産と収入を、神様の御心に従って管理していくことができますように。神様の愛と恵みに、喜びをもって応答して献げていくことができますように。献金の祝福を経験して、あなたの御言葉の真実さとあなたが今も確かに生きておられることの確信を強めてください。

この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。